

中学生の持つネットワークの構造とその社会化における機能 —都市と地方の比較計量研究—

工 藤 保 則

本稿は、都市と地方の中学生の姿を、ネットワーク論を手がかりとして、とらえようとしたものである。論文では、まず、ネットワークの構造の地域別の特徴を示した上で、ネットワークの違いによる意識（特に社会化に関する意識）の違いについて、M・グラノヴェッターの「弱い紐帯の強さ」理論を応用しながら計量的に考察している。それらを受けて、最後に、「中学生の社会化」について、それを10代という文脈の中でとらえる試みを行っている。

キーワード：中学生、ネットワーク、社会化

1. はじめに

中学生は、おもに家族集団と学校集団という2つの集団の中にくらしている。前者には父、母、きょうだい、祖父母等が存在し、後者には、友だちや先生が存在するだろう。集団の中にくらしているが、当然のことながら、中学生は集団と関係をむすんでいるのではなく、集団を構成する人たちと個別に関係をむすんでいるのである。けれども、集団の中の、誰と、どれほど、どのように、つきあっているかという、その実際のところはあまりしられていないのではないか。時に、特別な事例についての記述はされることはあっても、いわゆる「ふつう」の生徒の「ふつう」の関係となると、かえりみられることはあまりなかったような気がする。そこで本章では、中学生のとりむすんでいる人間関係をみることをとおして、彼らに接近しようと試みる。

中学生の人間関係を具体的にとらえた上で、さらにそれを発展させるために、本稿ではパーソナル・ネットワーク論を手がかりとしている¹⁾。名古屋と武生のデータから、まずそれぞれのネットワークの構造を記述し、その後、今までのネットワーク研究の成果を援用しながら、彼らが他者からうける意識面での影響について考察する。

なお、本稿での計量分析は、筆者が高校生の相談ネットワークについておこなった調査研究（工藤2001）とほぼ同じスタイルですすめている。

2. ネットワークの構造

(1) 名古屋の中学生

表1は名古屋の中学生において「重要なことを話し合った人」としてあがった人物の、被調査者との「間柄」を表している。これは「重要なことを話し合った人」を「1人しかあげなかった生徒」（62人）のもの、「2人あげた生徒」のもの（111人）、「3人あげた生徒」のもの（527人）、をふくんでいる。なお、それぞれのパーセンテージは、ケース数を基準にしたものである。

表1. 重要なことを話し合った人 (名古屋)

(%)

	父親	母親	兄姉	弟妹	祖父母	おじおば	以外の家族	同クラス	違クラス
男子	17.6	37.2	8.2	2.2	1.7	1.7	2.2	77.8	68.7
女子	10.4	45.6	8.7	1.9	1.1	0.2	1.4	72.6	84.5
	違う中学	恋人	先輩	後輩	担任	担任以外	他の先生	その他	
男子	8.8	3.9	3.1	1.4	9.3	3.4	8.8	4.8	
女子	11.2	6.7	1.4	1.4	5.9	3.9	7.0	5.0	

表2. 1人目にあがった人 (名古屋)

(%)

	父親	母親	兄姉	弟妹	祖父母	おじおば	以外の家族	同クラス	違クラス
男子	11.6	19.0	1.4	1.1	0.3	0.3	1.1	28.4	22.7
女子	4.8	25.6	1.7	0.6	0.0	0.0	0.3	24.2	31.5
	違う中学	恋人	先輩	後輩	担任	担任以外	他の先生	その他	
男子	2.8	1.1	1.7	0.3	2.8	0.9	2.3	2.0	
女子	3.1	1.7	0.6	0.0	1.7	0.8	2.0	1.4	

表1において上位にあがってくるものを3つあげると、男子では1位「同じ中学の同じクラスの友だち」(以下「同クラスの友人」とする)77.8%, 2位「同じ中学の違うクラスの友だち」(以下「違クラスの友人」とする)68.1%, 3位「母」37.2%となり、女子では1位「違クラスの友人」84.5%, 2位「同クラスの友人」72.6%, 3位「母」45.6%となっている。

このように、男女どちらにおいても上位にあがってくるものは、「同クラスの友人」「違クラスの友人」「母」と同じである。しかし、その順位は男子と女子とでは違っている。男女ともに上位2位までに入る「同クラスの友人」「違クラスの友人」をくらべた時、男子では「同クラスの友人」が1位となるが、女子では「違クラスの友人」が1位となる。この、女子における「違クラスの友人」の優位、男子における「同クラスの友人」の優位、ということ、つまり、男子は学習や学級活動をともにする、同じクラスにいる友だちを相談相手としてあげることが多く、女子は同じクラスではない友だちをあげることが多いというのは、中学生期における、男子と女子の友だちとの関係の持ち方の違いの一端をしめすものかもしれない。これについては、2-3であらためて述べることにする。

「母」は上でみたように、男女ともに3位にあがってくるが、もう一方の親である「父」はどうであろう。結論からいうと、相談相手としては「父」の影はかなり薄いといえる。男子では17.6%, 女子では10.4%となっているが、「母」とくらべると、それぞれ19.6ポイント、35.2ポイントも少なく、とくに女子におけるそのひらきは大きい。男女ともに、そして女子においてはとくに、「父」は「母」には遠くおよばないといえそうである。

「先生」については、選択肢には「学校の担任の先生」(以下「担任の先生」とする)、「学校の担任以外の先生」(以下「担任以外の先生」とする)、「それ以外の先生」(以下「他の先生」とする)、という3つのカテゴリーを用意したが、男子ではそれぞれ9.3%, 3.4%, 8.8%であり、女子ではそれぞれ5.9%, 3.9%, 7.0%である。合計して「先生」全体としてみると、男子21.5%, 女子16.8%となり、どちらにおいても「父」よりも多くなり、この時期、「先生」はそれなりに「相談相手」となっているようである。また、3つのカテゴリーを個別にみると、男子では「担

任の先生」が多くあがるのだが、女子においては「担任の先生」よりも「他の先生」の方が多くあがる。「他の先生」というのは、おそらく学習塾や予備校の先生をさしているのだろうが、この女子における「担任の先生」と「他の先生」との関係は、先にみた「同クラスの友人」と「違クラスの友人」の関係とにたものを感じさせ、ここにも、この時期における女子の関係のもち方の一端があらわれていると思われる。

さてここで、とくに1人目にあがった人物に注目したい。前述したように、被調査者各人においてその相談のトピックはそれぞれであろうし、また、あがった相手それぞれに違うトピックで相談している場合もあろうが、相談相手として1人目にあがった人物というのは、2人目以降にくらべれば重みや意味をもった存在と考えることもできる。

「重要なことを話し合った人」として1人目にあがった人物をしめしたものが表2である。ここでも、それぞれの「間柄」における割合は、ケース数を基準にしたものである。男子では1位「同クラスの友人」28.4%、2位「違クラスの友人」22.7%、3位「母」19.0%となっている。これは全体の傾向をみた表1と同じ傾向をしめしている。女子では、1位「違クラスの友人」31.5%、2位「母」25.6%、3位「同クラスの友人」24.2%となっている。表1と比較すると、わずかの差ではあるが2位と3位が入れかわり、「母」が2位となってくるのが女子における特徴であろう。

また、あらためて述べるまでもないが、「重要なことを話し合った人」として1人目にあがる人物というのは、データとしては「話し合った人」を「1人あげた生徒」、「2人あげた生徒」の1人目のもの、「3人あげた生徒」の1人目のものから構成されている。この三者について表したのが表3～表5である。表3～表5をみた場合、最も多くあらわれるのは、男子の「1人あげた生徒」では「母」、「2人あげた生徒」でも「母」、「3人あげた生徒」では「同クラスの友人」となる。女子では「1人あげた生徒」では「母」、「2人あげた生徒」では「同クラスの友人」と「違クラスの友人」が同率で最多だがほぼ同じだけ「母」もあがり、「3人あげた生徒」では「違クラスの友人」となっている。ここから、あげる人数が少なくなるほど、「母」の割合が高くなっ

表3. 「1人あげた生徒」の1人目にあがった人 (名古屋) (%)

	父親	母親	兄姉	弟妹	祖父母	おじおば	以外の家族	同クラス	違クラス
男子	5.0	30.0	0.0	0.0	0.0	0.0	2.5	25.0	20.0
女子	4.5	36.4	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	18.2	31.8
	違う中学	恋人	先輩	後輩	担任	担任以外	他の先生	その他	
男子	0.0	2.5	2.5	0.0	7.5	0.0	5.0	0.0	
女子	4.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	4.5	0.0	

表4. 「2人あげた生徒」の1人目にあがった人 (名古屋) (%)

	父親	母親	兄姉	弟妹	祖父母	おじおば	以外の家族	同クラス	違クラス
男子	18.8	29.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	16.7	22.9
女子	1.6	28.6	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	30.2	30.2
	違う中学	恋人	先輩	後輩	担任	担任以外	他の先生	その他	
男子	2.1	0.0	2.1	0.0	0.0	0.0	4.2	4.2	
女子	1.6	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	4.8	

表5. 「3人あげた生徒」の1人目にあがった人（名古屋）

(%)

	父親	母親	兄姉	弟妹	祖父母	おじおば	以外の家族	同クラス	違クラス
男子	11.6	15.8	1.5	1.5	0.4	0.4	0.8	30.5	23.6
女子	5.6	24.3	1.5	0.7	0.0	0.0	0.4	23.5	31.3
	違う中学	恋人	先輩	後輩	担任	担任以外	他の先生	その他	
男子	3.5	1.2	1.5	0.4	2.7	1.2	1.5	1.9	
女子	3.4	2.2	0.7	0.0	2.2	1.1	2.2	0.7	

てくることがわかる。

(2) 武生の中学生

表6は武生の中学生にとって「重要なことを話し合った人物」としてあがった人物を表している。これは名古屋のものを表した表1と同様に、「1人しかあげなかった生徒のもの」(34人)、「2人あげた生徒のもの」(49人)、「3人あげた生徒のもの」(454人)を含んでおり、またそのパーセンテージはケース数を基準にしたものである。

表6において上位にあがったものを3つあげると、男子では1位「同クラスの友人」104.6%、2位「違クラスの友人」65.6%、3位「母」33.9%となり、女子でも1位「同クラスの友人」106.2%、2位「違クラスの友人」71.9%、3位「母」33.9%となっている。男子も女子も上位にあがるものは順位を含めて同じであり、そのポイントもにかよったものになっている。

「父」は男子19.5%、女子9.0%となっており、その間には約2倍の差がある。「母」とのひらきをみた場合でも、男子は14.4%、女子は25.9%と、女子におけるひらきは男子のものよりかなり大きくなっている。また、女子においては「兄・姉」が8.7%となる。前述した「父」のポイントと、必ずしも全員にいるわけではない「兄・姉」のポイントがあまりかわらないということは、この時期の女子における「父」の位置をしめしているのかもしれない。

「先生」は男子では「担任の先生」10.9%、「担任以外の先生」0.7%、「他の先生」1.5%、女子ではそれぞれ7.6%、4.1%、3.1%となっている。合計のポイントはほぼ同じになるが男女でその中味は異なり、男子では「担任の先生」がそのほとんどなのだが、女子では「以外の先生」や「他の先生」もあがり、「担任の先生」に集中することはない。

次に1人目にあがった人物についてみる。「重要なことを話し合った人」として1人目にあがった人物をしめしたのが表7である。男子では1位「同クラスの友人」34.3%、2位「母」17.5%、3位「違クラスの友人」16.4%、女子では1位「同クラスの友人」36.4%、2位「違クラスの友人」25.2%、3位「母」20.6%となる。この1人目にあがった人物のデータは2-1でも述べたように、話し合った人を「1人あげた生徒」、「2人あげた生徒」の1人目のもの、「3人あげた生徒」の1人目のものからなっている。武生のデータの特徴はかなりの多くが話し合った人を「3人あげた」ことにあり、それと「1人あげた生徒」「2人あげた生徒」のものを同列にならべてくらべるのはここもとないが、表8～表10はそれぞれ「1人あげた生徒」「2人あげた生徒」「3人あげた生徒」のものをしめしたものである。

それぞれの1位にあがるものをみた場合、男子では「1人あげた生徒」では「母」、「2人あげた生徒」では「母」と「同クラスの友人」、「3人あげた生徒」では「同クラスの友人」となっており、女子でもそれぞれ、「母」、「同クラスの友人」、「同クラスの友人」となっている。相談相

表6. 重要なことを話し合った人 (武生)

(%)

	父親	母親	兄姉	弟妹	祖父母	おじおば	以外の家族	同クラス	違クラス
男子	19.5	33.9	7.0	2.3	1.1	1.5	3.5	104.6	65.6
女子	9.0	34.9	8.7	3.4	2.0	1.0	4.8	106.2	71.3
	違う中学	恋人	先輩	後輩	担任	担任以外	他の先生	その他	
男子	8.2	5.8	4.2	1.9	10.4	0.7	1.5	0.3	
女子	12.9	2.4	4.1	0.6	7.6	4.1	3.1	3.4	

表7. 1人目にあがった人 (武生)

(%)

	父親	母親	兄姉	弟妹	祖父母	おじおば	以外の家族	同クラス	違クラス
男子	11.3	19.1	1.6	0.8	0.4	0.4	0.8	37.5	18.0
女子	4.5	20.6	2.1	0.7	0.3	0.3	1.4	36.4	25.2
	違う中学	恋人	先輩	後輩	担任	担任以外	他の先生	その他	
男子	2.0	2.0	1.2	0.4	4.3	0.0	0.4	0.7	
女子	3.8	1.4	0.0	0.0	1.7	0.3	0.3	0.4	

表8. 「1人あげた生徒」の1人目にあがった人 (武生)

(%)

	父親	母親	兄姉	弟妹	祖父母	おじおば	以外の家族	同クラス	違クラス
男子	4.8	52.4	0.0	4.8	0.0	0.0	4.8	9.5	19.0
女子	7.7	46.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	23.1	23.1
	違う中学	恋人	先輩	後輩	担任	担任以外	他の先生	その他	
男子	0.0	0.0	0.0	0.0	4.8	0.0	0.0	0.0	
女子	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	

表9. 「2人あげた生徒」の1人目にあがった人 (武生)

(%)

	父親	母親	兄姉	弟妹	祖父母	おじおば	以外の家族	同クラス	違クラス
男子	13.6	31.8	0.0	0.0	0.0	0.0	4.5	31.8	4.5
女子	3.7	22.2	3.7	0.0	0.0	0.0	0.0	44.4	22.2
	違う中学	恋人	先輩	後輩	担任	担任以外	他の先生	その他	
男子	0.0	4.5	4.5	0.0	4.5	0.0	0.0	0.0	
女子	0.0	0.0	0.0	0.0	3.7	0.0	0.0	0.0	

表10. 「3人あげた生徒」の1人目にあがった人 (武生)

(%)

	父親	母親	兄姉	弟妹	祖父母	おじおば	以外の家族	同クラス	違クラス
男子	11.9	14.8	1.9	0.5	0.5	0.0	0.0	40.5	19.5
女子	4.5	18.9	2.0	0.8	0.4	0.4	1.6	36.1	25.8
	違う中学	恋人	先輩	後輩	担任	担任以外	他の先生	その他	
男子	3.5	1.2	1.5	0.4	2.7	1.2	1.5	1.9	
女子	4.5	1.6	0.0	0.0	1.6	0.4	0.4	0.8	

手としてあげる人数が少なくなるほど「母」の順位があがってくることがわかる。

(3) 名古屋の中学生と武生の中学生の比較

ここで、ネットワークの構造において、名古屋/武生という地域の別にかかわらず同じになるもの、また、地域の別により違ってくるものをみてみたい。

まず、地域の別にかかわらず同じになるものからみていきたい。名古屋での表1～5、武生での表6～10をみた時、最初にいえるのは、どれにおいても上位3位までにあがってくるのは、「同クラスの友人」「違クラスの友人」「母」の3種で同じだということである。その上で、1人目にあがってくる人物をみた場合、質問項目によって相談相手に優先順位をつけるように指示していないが、そこにもやはり共通する意味のある人物をみることができる。

当然のことながら、「母」はひとりであるのに対し、「同クラスの友人」や「違クラスの友人」は複数存在する。けれども、名古屋と武生のどちらにおいても1人目にあがってくる人物として「同クラスの友人」や「違クラスの友人」が突出することはなく、それよりやや少ない割合で「母」があがり、また、その相談相手としてあがってくる人数が、2人、1人と少なくなるほど、「母」の割合は高くなる。つまり、中学生においても「母」は、ある意味で特別な存在だと考えられるのである。幼児期、児童期において特徴的な関係といわれる母－子関係が、中学生期においても、男女ともに強い絆として持続しており、そのことは名古屋/武生のどちらでも同じようである。

つづいて、地域の別により違ってくるものについてみることにする。のべ人数での比較をした場合、表1と表8をくらべた時、上位にあがってくるものは、名古屋/武生とも「同クラスの友人」「違クラスの友人」「母」で同じであるのだが、その中味をみると地域による違いがみえてくる。武生をみた場合、まず最初に目につくのは「同クラスの友人」のでてくる割合の高さである。男子では104.2%、女子では106.2%となり、どちらも1ケースに1人以上の「同クラスの友人」があがってくることになり、かなりの同クラス指向といえよう。今回の対象校となった武生の中学が、名古屋の中学にくらべてクラス数が極端に少ないというわけでもないことから、これは武生における特徴のひとつといえるだろう。

一方、名古屋では、男子は「同クラスの友人」が最も多くなるのだが、そこには武生ほどの高い同クラス指向はうかがえず、女子においては「違クラスの友人」が最も多くなる。おそらく女子も「同クラスの友人」ともそれなりに楽しくつきあっているだろうが、「重要なことを話合った人」としては「違クラスの友人」がでてくるのであろう。2－1でも述べたが、ここに名古屋における女子の友人との関係のもち方の特徴をみることができるかもしれない。

ところで、筆者が別におこなった都市部の高校生を対象とした調査では、男子とくらべて女子は、同じ中学の友だちといっしょに高校に進学する傾向が強いことがあきらかになった（工藤2001：168）。上述したことも含めて考えると、都市の女子における、いっしょに高校に進学する友だちというのは、中学時代からこだわって選択しつきあってきた友だちと思われ、そこには強いつながりを感じることができる。これらから、都市の女子生徒における友人の選択や友人との交際には、男子とは異なる特徴があると考えることができる。それは、先にしめした「他の先生」や「違クラスの友人」との関係もあわせて考えると、都市の女子に特有の他者との距離のとり方・関係のむすび方のたくみさとうけとることも可能であろう。これは地方の女子生徒は、あまりもちあわせていないものかもしれない。

3. ネットワークと意識

前節では「間柄」をもちいながら、具体的に、中学生の人間関係をとらえようとしたが、本節ではやや抽象的にネットワークをとらえ、「関係性」や「空間」という観点から中学生に接近してみたい。そのために、本節では手がかりとして、M. グラノヴェターのいう「ウィークタイ（強い紐帯）／ストロングタイ（弱い紐帯）」の視点をとりいれている（以下、タイという言葉はその有向ラインを表すものとしてもちいる）。

今回のデータにおいては、あげられた相手との関係のもち方として、「ストロングタイ」からなる関係性と「ウィークタイ」からなる関係性という相対的な2つの関係性を設定することができだろう。その際、本節では、相手との「接触頻度」（以下「頻度」とする）と「（主観的な）親密さ」（以下「親密」とする）の2要素を使ってタイの強さ／弱さをはかっていることから²⁾、前者はパーソナル・ネットワークが「日常的に強くまじわる親しい他者（達）」（以下「関係の強い他者」とする）から構成される生徒といえ、後者はパーソナル・ネットワークが「日常的にはあまりまじわらないそれほど親しくない他者（達）」（以下「関係の弱い他者」とする）から構成される生徒といえるだろう。

相互作用論の立場からは、他者とのかかわりが社会的自我を形成しそれが意識を導くといわれているが、いいかえるとそれは、他者との関係性が違えば意識が違ってくるとなるだろう。本節は、いわばこの「関係性の違いによる意識の違い」について検討することを目的にしている。

そこで、以下では「重要なことを話し合った人」を3人あげた生徒のデータを使い、それ（後述するものにしたがっていうと「家族・親族を含んだデータ」527人、男子259人、女子298人）と、そのデータの一部である「重要なことを話し合った人」としてあがる3人の中に「家族・親族」が1人も入ってこないデータ、いいかえるなら「家族・親族を含まないデータ」（257人、男子135人、女子122人）を使って、「関係性の違いによる意識の違い」について分析・考察している³⁾。なお、「家族・親族を含まないデータ」を設定したのは以下の理由による。話し合う相手の3人の中に家族・親族が1人も含まれない生徒というのは、そのこと自体で特徴的な生徒であると考えられ、その彼らの特徴を「家族・親族を含んだデータ」と比較しながらとらえたいと考えたからである。またその比較によって、「家族・親族」とそれ以外の人との役割や機能の違いもとらえたいと考えている。

関係性と意識との関係を計量的にさぐるために、まず、「頻度」「親密」の各要素に表されたタイを、「ウィーク」→「ストロング」という連続性のもとに整理した。なおその際、「家族・親族」とのタイについては、タイの中でも最もストロングなものと考えことにする。その上で、「頻度」「親密」の2要素を独立変数として、本調査の中の意識項目を従属変数に、男女別に重回帰分析をほどこしている⁴⁾。

意識項目としては「高校生活意識」、「職業意識」の2種類を用意した。各項目の設問は具体的には次のものからなっている。「高校生活意識」項目は、「授業をサボったり、学校を休みたくなることがある」（以下「サボる」とする）、「学校にいるときよりも、学校外での生活の方が楽しい」（以下「学校外」とする）。「職業意識」はさらに「職業観」と「資格観」という2つの観点から考え、前者は「遠い将来のためにしたいことをしないで生きるよりも、今のしたいことに忠実に生きるべきだ」（以下「今したいこと」とする）、「ひとつの職業にとらわれるより、その時々により適した職業についた方がよい」（以下「適した仕事」とする）からなっている。後者は

「資格は技能をみがいた人をたたえるためのものだ」(以下「技能たたえる」とする)、「資格をいかす仕事は私にむいている」(以下「資格むいている」とする)からなっている。それぞれ4点法の間隔尺度であり、肯定的回答に高得点があたえられている。

(1) 名古屋の中学生

(a) 「家族・親族を含んだデータ」の分析

表11は名古屋の中学生の「家族・親族を含んだデータ」において、先の重回帰分析をおこなった結果をしめしたものである。表11をみて、まず最初にいえることは、10%水準で考える時、有意となったのは、男子では「サボる」「学校外」、女子では「学校外」と、それぞれ「高校生活」意識項目であり、女子の「サボる」は10%水準では有意とならなかったが、ほぼそれに近いものとなった。一方で職業意識項目は、男女どちらにおいても、どの質問項目においても、有意な結果を得られなかった。

先にも述べたが、本稿では「頻度」「親密」をタイを構成する独立した要素としている。その2要素の偏回帰係数の符号が正か負でそろっていれば、「ストロング/ウィーク」という2分法をもちいて、簡単にタイの効果を証明することができる。本調査において10%水準で有意となった項目は、偏回帰係数の符号がそろったものばかりである。

表11からまず男子についてみていく。男子では「関係性の弱い」生徒ほど、学校生活において「学校をサボったり、学校を休みたくなること」があり、「学校にいるときよりも、学校の外での生活が楽しく、女子でも「関係性の弱い」生徒ほど「学校の外での生活の方が楽しい」ということである。各項目はいわば学校生活への適応の様をたずねたものととれるが、とすれば上述したことは「関係性が強い」生徒ほど学校生活において適応的な意識をもち、一方で、「関係性が弱い」生徒ほど学校生活において適応的な意識をもたない、といえるだろう。

ところで、パーソナル・ネットワークをとらえる方法はいまだ確立されているとはいえないが、ここでは、質問項目によって得られるパーソナル・ネットワークは、質問の文意から「相談」ネットワークということにしたい。これらをふまえて、本項での結果を要約し書きあらためると次のようになる。

名古屋の中学生においては、相談ネットワークに「家族・親族」が含まれる場合は、「関係の強い他者」(ここでは「家族・親族」となる。以下「家族・親族」とする)に相談する生徒ほど中学生生活に適応的な意識を有する傾向があり、「関係の弱い他者」に相談する生徒ほど中学生生活に適応的な意識を有さない傾向がある。

(b) 「家族・親族を含まないデータの分析」

ここでは「重要なことを話し合った人」としてあげる3人に、「家族・親族」がでてこない生徒のデータを分析する。以下、分析の手続きとしては前項と同じことをおこなう。

前項と同様に重回帰分析をおこなった結果をしめしたのが表12である。表12からいえることは、10%水準で考える時、前項で有意となった「中学生生活意識」は男女とも有意とはならず、ここで有意な結果が得られたのは「職業意識」であり、またその「職業意識」の項目をみれば男女で反応する項目が違ってきているのである。男子では「職業観」項目が有意となり、女子では「資格観」項目が有意となっている。この性別による違い自体、非常に興味深い。というのも、中学3年生という時期からすると、男子も女子もそれぞれに、「現在の生活」ではなく「将来の生活」にかかわるものが表出していると考えられるからだ。

表12からまず男子についてみていく。男子では「関係の強い他者」に相談する生徒ほど、「遠

表11. 「家族・親族を含んだデータ」における意識についての重回帰分析（名古屋）

高校生活意識					職業意識							
					職業観				資格観			
「サボる」		「学校外」		「今したいこと」		「有利な仕事」		「技能たたえる」		「資格むいている」		
	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子
頻度	.003	-.108	.057	-.350	.034	.022	.131	.092	.126	.012	-.050	.064
親密	.143+	-.056+	-.148	-.223	.076	-.006	-.046	-.055	.022	.110+	.104	.070
R2	.024*	.018+	.021+	+.029*	.008	.001	.016	.009	.018	.012	.011	.009
+p<.10 *p<.05 **p<.01												

+p<.10 *p<.05 **p<.01

表12. 「家族・親族を含まないデータ」における意識についての重回帰分析（名古屋）

高校生活意識						職業意識							
						職業観				資格観			
「サボる」		「学校外」		「今したいこと」		「有利な仕事」		「技能たたえる」		「資格むいている」			
	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	
頻度	-.050	-.270	.025	-.107	.027	-.052	.108+	-.052	.016	.044	.024	.053	
親密	.040	-.128	-.050	-.073	.153*	-.024	.056	.090	.048	.244**	.078	.227**	
R2	.005	.063	.004	.011	.027*	.011	.020+	.010	.002	.036*	.006	.042**	
+p<.10 *p<.05 **p<.01													

+p<.10 *p<.05 **p<.01

い将来のためにしたいことをしないで生きるよりも、今のしたいことに忠実にいきるべきだ」「ひとつの職業にとらわれるより、その時々により利便な職業についての方がよい」と思っている。一見、「関係の強い他者」に相談する男子生徒は、いわゆるコンサマトリー化した職業意識をもつととらえられるかもしれないが、必ずしもそうとはいえないだろう。ここにあらわれているのは、今さえよければそれでいいという刹那的な職業意識というよりも、（会社）組織から距離をとるといふかたちで、今この時代でのリアリティにそった彼らなりの現実的な職業意識をもっていることととらえることができるかもしれない。逆にみるとそれは、「関係の弱い他者」に相談する男子生徒ほど、「遠い将来のためにしたいことをしないで生きるよりも、今したいことに忠実に生きるべきだ」とは思わず、「ひとつの職業にとらわれるより、その時々により利便な職業についての方がよい」とは思わない、と（会社）組織に適応的なこれまでの職業観にそう意識を有するといえよう。

一方、女子での「関係の強い他者」に相談する生徒は、（会社）組織から距離をとるといふ方向は男子と同じなのだろうが、女性としてより現実的な職業意識をもつということで、「資格は技能をみがいた人をたたえるためのものだ」「資格をいかす仕事は私にむいている」と、資格に対して積極的な意識をもつようになるのではなかろうか。また、それは逆にいうと、「関係の弱い他者」に相談する女子生徒は資格には積極的ではないとなろうか。このことを前項のように要約して示すと次のようになる。

名古屋の中学生においては、相談ネットワークに「家族・親族」が含まれない場合は、「関係の強い他者」（ここでは友だち等がその中心となろう。以下「（友人等の）関係の強い他者」とする）に相談する生徒ほど、（会社）組織から距離をとる職業意識を有する傾向があり、「関係の弱

い他者」に相談する生徒ほど、(会社)組織に適応的な職業意識を有する傾向がある。

(2) 武生の中学生

ここでは武生のデータについてみていく。なお、「家族・親族を含んだデータ」は454人(男子210人, 女子244人), 「家族・親族を含まないデータ」は251人(男子122人, 女子129人)となっている。

(a) 「家族・親族を含んだデータ」の分析

表13はこれまでと同様に重回帰分析をおこなった結果である。表13をみてまず最初にいえることは、10%水準でみた時に有意となるのは、男子では「サボる」、女子では「サボる」「学校外」である。男子での「学校外」は $p=.112$ と10%水準をわずかにこえるレベルであるので、それも含めて考えるとすると、「中学生生活意識」が有意なものとしてあらわれてくるといえよう。また、その偏回帰係数の符号はすべてマイナスでそろっている。一方、「職業意識」については、女子における「資格むいている」が有意となるが、他の項目は有意とはならない。当然、女子の「資格むいている」の意味も考えないといけないのだが、ここでは傾向をみることを主な目的とし、それを一端、横においておくことにする。

そうすると、ここでの結果は先の表6のものとほぼ同じものになってくる。これを要約して書くと次のようになる。

武生の中学生においては、相談ネットワークに「家族・親族」が含まれる場合は、「関係の強い他者」(ここでは「家族・親族」となる。以下「家族・親族」とする)に相談する生徒ほど中学生生活に適応的な意識を有する傾向があり、「関係の弱い他者」に相談する生徒ほど中学生生活に適応的な意識を有さない傾向がある。

表13. 「家族・親族を含んだデータ」における意識についての重回帰分析(武生)

	高校生活意識				職業意識							
					職業観				資格観			
	「サボる」		「学校外」		「今したいこと」		「有利な仕事」		「技能たたる」		「資格むいている」	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子
頻度	-.210**	-.098	-.031	-.057	.084	-.032	-.002	.021	.060	.026	-.050	.200**
親密	-.022	-.103	-.121	-.123+	.120	-.041	-.017	-.090	.015	.028	.104	.080
R2	.043*	.022+	.019	.020+	.018	.003	.000	.008	.004	.002	.011	.050*
+p<.10 *p<.05 **p<.01												

表14. 「家族・親族を含まないデータ」における意識についての重回帰分析(武生)

	高校生活意識				職業意識							
					職業観				資格観			
	「サボる」		「学校外」		「今したいこと」		「有利な仕事」		「技能たたる」		「資格むいている」	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子
頻度	-.182+	-.132	-.023	-.025	.200*	.113	.069	.018	.234	.082	-.030	.253**
親密	-.000	-.039	.069	-.121	.090	.103	-.109	.003	.019	.088	.045	.005
R2	.033	.021	.005	.016	.052*	.027	.015	.000	.056*	.017	.003	.065
+p<.10 *p<.05 **p<.01												

(b) 「家族・親族を含まないデータ」の分析

ここでは武生のデータのうち「重要なことを話し合った人」としてあがった3人に、「家族・親族」がでてこない生徒のデータを分析する。

重回帰分析をおこなった結果をしめしたのが表14である。10%水準でみた場合、ここでは男女とも「中学生生活意識」は有意とはならない。有意となるのは「職業意識」であり、個別項目でいうと男子では「今したいこと」「技能たたえる」、女子は「資格むいている」が有意となり、それらの偏回帰係数の符号はプラスでそろっている。この結果も「関係に強い他者」「関係の弱い他者」を使って記述したいのだが、結果の解釈はすぐにはしにくい。くわしい解釈は稿をあらためておこなうこととし、ここでは仮のものとして以下のように要約しておきたい。

武生の中学生においては、相談ネットワークに「家族・親族」が含まれない場合は、「関係の強い他者」（ここでは友だち等がその中心となろう。以下「(友人等の) 関係の強い他者」とする）や「関係の弱い他者」は、「中学生生活意識」項目とは有意とはならず、「職業意識」項目と有意となる。

(3) 名古屋の中学生と武生の中学生の比較

ここでは、(1)(2)でしめした「ネットワークと意識」にかんする4つの要約を比較検討してみたい。下にあらためて要約をしめすことにするが、それぞれ便宜上①～④と番号をつけている。

・名古屋の中学生

①相談ネットワークに「家族・親族」が含まれる場合は、「家族・親族」に相談する生徒ほど中学生生活に適応的な意識を有する傾向があり、「関係の弱い他者」に相談する生徒ほど中学生生活に適応的な意識を有さない傾向がある。

②相談ネットワークに「家族・親族」が含まれない場合は、「(友人等の) 関係の強い他者」に相談する生徒ほど、(会社)組織から距離をとる職業意識を有する傾向があり、「関係の弱い他者」に相談する生徒ほど、(会社)組織に適応的な職業意識を有する傾向がある。

・武生の中学生

③相談ネットワークに「家族・親族」が含まれる場合は、「家族・親族」に相談する生徒ほど中学生生活に適応的な意識を有する傾向があり、「関係の弱い他者」に相談する生徒ほど中学生生活に適応的な意識を有さない傾向がある。

④相談ネットワークに「家族・親族」が含まれない場合は、「(友人等の) 関係の強い他者」や「関係の弱い他者」は「中学生生活意識」項目とは有意とはならず、「職業意識」項目と有意となる。

まず、それぞれの地域内での比較をおこなう。名古屋での①と②における、また武生での③と④における差異を同時にみていきたい。それぞれ前提部において、相談ネットワークに「家族・親族」が含まれているか否かが違っているのだが、「家族・親族」が含まれていないといっても、当然のことながらそれは、その生徒に「家族・親族」が存在しないということではなく、「家族・親族」はいるが相談相手としてそれを選ばないということである。したがって、地域内の比較をすることで、結果として「家族・親族」の機能が（また、「(友人等の) 関係の強い他者」の機能も）あきらかになってくるとと思われる。

①と②、③と④をくらべた時、そこには、前提部分における違いだけでなく、その意識の意味するところにも違いがでている。①と②の比較、③と④の比較のどちらにおいても、「家族・親族」が含まれている場合（つまり①③）は、現在の学校での生活についての反応が、また「家

族・親族」が含まれない場合（つまり②④）は、中学生にとっては将来のことである職業についての意識において反応がある。それらは、その反応の中味から、社会化にかんする違いとすることもできよう。井上忠司は社会化を「社会の適応基準の内面化」と定義しているが（井上1988：118）、それによって考えると、①と③は現在の生活での社会化がされているか否か、②と④はある意味での予期的な社会化がされているか否か、と理解することもできよう。ここには地域での違いはみうけられない。

つづいて地域間での比較をおこなうことにする。つまり、名古屋での①②のセットと武生での③④のセットの比較検討である。ここでまず最初にいえることは、相談ネットワークに「家族・親族」が含まれる場合に当たる①と③は同じになっているということである。ここにも、地域による違いはあらわれてきていない。一方、「家族・親族」が含まれない場合に当たる②と④では、やや様相が異なる。②では将来の所属集団になるであろう（会社）組織に距離をとる/適応的となり、またそこには2-2で述べたようなジェンダー的な要素もうかがいとることができる。④では②でみられたほどの明確な意識の分化はみられず、「職業意識」への反応にとどまる。ここには地域による違いが、多少、存在するといえるだろう。

さて、ここまでにおこなった2つの比較は、相談相手のある意味での「重要な他者」と考えるとなると、その存在位置と社会化の時制の違いをとらえたものといえよう。とすると、地域の別にかかわらず、「重要な他者」が「家族・親族」であれば現在での社会化がなされ、「（友人等の）関係の強い他者」であれば予期的な社会化がなされるということであるなら、「家族・親族」と「（友人等の）関係の強い他者」は、それぞれどちらも社会化の主体であるが、その機能が客体において発揮される時制が異なる存在だと理解することができる。

また、その上で、地域における違いを考えると、それは「（友人等の）関係の強い他者」が主体となる際の意識の分化程度の違いととらえることができるかもしれない。先に述べたが、②の名古屋では男女別にそれぞれで、この時代におけるリアリティにそった将来に対する現実的な意識としてあらわれ、④の武生ではそのようには（まだ？）分化していないととらえられるのである。

これらは1節で述べた本節の目的である「関係性の違いによる意識の違い」についての検討という点からいえば、それが存在するということがしめされたことになり、また、くわえて、そこにも地域性による差異があることをしめしたものだといえよう。

5. 中学生の社会化から10代の社会化へ

社会化について最も多く議論されるのは、子ども期のそれである。また、成人期以降の社会化も、職業的社会化、継続的社会化という観点から注目されることも多い。子ども期、成人期という2つの時期の間にある青年期は、社会化の文脈で語られることはあまりないようである。先にしめしたが、井上は「人間の一生は・・・社会の適応基準を内面化していく『社会化』の課程である」（井上1988：118）というが、それにしたがうと、青年期の入口ともいえる中学生時代も社会化における重要な時期のひとつと考えられよう。なぜなら、この時期は、10歳前後の頃にあると思われる社会的自我の分化がなされた後の、他者との多様な関係性がもたれるようになってすぐの時期だと考えられるからである（工藤1998）。

社会化における重要なトピックのひとつと思われる中学生の社会化だが、実際のところそれは、それほど注目されてきたわけではない。この頃になると、社会化の重要な主体のひとつである家

族員との関係は、子ども期ほどの注目はあつめなくなる。また、学校の社会化機能は考察されることはあるが、それはあくまで集団としての学校であり、その構成員である生徒には関心はあまりはられないようである。けれども、本稿でみてきたように、それまでの子ども期における重要な他者である家族員—とくに母親—や、また、中学生にとっての学校の構成員といえる友だちは、この時期においてもそれまでとかわらず重要な社会化の主体といえそうである。

家族集団や学校集団から中学生にアプローチするのは別の接近法として、生徒それぞれのとりむすぶ関係（ネットワーク）から中学生にアプローチした本稿では、次のような知見が得られた。

- ・「家族・親族」と「(友人等の) 関係の強い他者」は、どちらも社会化の主体であるが、その機能が客体において発揮される時制が異なる。「家族・親族」は現在の社会化の主体と考えられ、「(友人等の) 関係の強い他者」は予期的な社会化の主体と考えられる。これらは地域の別にかかわらない。

- ・「(友人等の) 関係の強い他者」が主体となる予期的な社会化では、地域の別によって、その意識の分化程度が違ってくる。都市では、時代のリアリティにそった将来に対する現実的な意識がみられるが、地方ではそこまでの分化はない。

なお、「家族・親族」や「(友人等の) 関係の強い他者」と相対的な位置にある「関係の弱い他者」については、紙幅のつごうもあり、別の機会に論じたいと思う。また、ネットワークと意識の形成メカニズムとの関係については、筆者は別に試論的な考察をおこなっているが(工藤2002)、本稿での成果をとりいれての本格的な考察についても稿をあらためたいと思う。

ところで、筆者が以前におこなった高校生を対象としたネットワーク調査では、本稿で使用したものとほぼ同じ質問項目をもちいており、また、ほぼ同じスタイルで分析をおこなっている(工藤2001)。そこでこの知見と上記した本稿での知見を比較することで、中学生、高校生という10代でのタテの比較も可能となるが、それは次の課題としたい。

考えてみれば10代というのはおもしろい時期である。最初は小学校の「児童」であったものが中学・高校の「生徒」になり、そして大学等の「学生」あるいは「社会人」になるという、数年のサイクルで「変態」をくりかえす10年間である。またその期間は、子どもとおとなの間にあって、もう子どもではないといわれる一方で、まだおとなではないともいわれる時期でもある。

子どもでもおとなでもない彼らは、いくつかの環境の変化の中で、どのように他者と出会い、関係をきずいていっているのだろうか。その関係には、継続し深まるものがある一方で、消滅するものもあるだろう。それは固定・完成されていないことによるおもしろさともいえるだろう。この他者との不安定な関係の中で「自分」というものをつくっていくのが、10代という時期のようにも思える。

本稿では、中学生の「ネットワークの構造」「ネットワークと意識」について、そのデータの記述と簡単な考察をおこなってきた。そして最後に「子どもでもおとなでもない10代」について少しふれてみた。今後は本データのさらなる分析をおこなうとともに、社会化だけにかぎらず彼らの自己—他者関係全般についての考察をすすめる。その先で10代という時間の中に中学生を位置づける作業をおこないたいと考える。

注

- 1) パーソナル・ネットワークを測定する方法はいまだ確立されているとはいえないが、今回、質問項目をつくる際に参考としたのは1985年版のGeneral Social Surveyのネットワークにかんする質問群

である。具体的な質問項目は、次のようになっている。まず、被調査者である中学3年生にとって「過去半年の間に、重要なことを話し合った人」を「思いうかぶ順」に「3人まで」あげてもらい、それぞれについてそのあげられた人物の「間柄」と「性別」をたずねている。その上で、被調査者とそのあげられた人物との「接触頻度」(以下「頻度」とする)、「接触期間」(以下「期間」とする)、「(主観的な)親密さ」(以下「親密」とする)をたずねている。なお、GSSのネットワーク質問についての詳しい解説はBurt (1984)、安田 (1997) を参照してほしい。

- 2) この視点は、グラノヴェターの研究を応用しようとするものである。そこで確認しておきたいのだが、グラノヴェターはタイの強さを「時間量、親密さ、情緒的強さ、相互性の結合」で表している(Granovetter1973:1361)。その際、鹿又伸夫もいうように「親密さ」と「情緒的強さ」は実質的におなじ内容をさすと考えられる(鹿又1991:114)。また、「相互性」については今回のデータの性格上、関係しないので考慮に入れなくてもよいだろう。とすると、タイの強さをはかる要素として、グラノヴェターの定義における「時間量」と「親密さ」が残ることになる。本調査では「時間量」に関係するものとして「頻度」と「期間」の値を得ているが、本稿では「頻度」によって「時間量」を代表させ、それと「親密」との2要素をもってタイを構成する要素と考えることにする。なお、各要素においては得られた3人分の得点を合算している。
- 3) 分析にもちいた2つのデータは、片方(「家族・親族を含まないデータ」)がもう片方(「家族・親族を含んだデータ」)の一部分であるという性格上、単純に比較するには適さないデータともいえる。けれども試論的な本稿では、まず理解しやすい像を求めることを望んだため、その分析の説得力には限界はあるが、前述した2つのデータを使って分析・考察をすすめている。
- 4) あらためて述べるまでもないが、本調査は対象の性格上、従来から意識についての重要な差異化要因として検討されてきた「学歴」「年齢」「職業」が、それぞれ「中学3年在学中」「14～15歳」「非該当」と同一である。いいかえれば、すでにその要因がコントロール済みといえよう。

引用文献

- Burt R.S., "Network Item and General Social Survey", *Social Networks*, 6:293-339, 1984
- Granovetter M., "The Strength of Weak Ties", *American Journal of Sociology*, 78(6):1360-1380, 1973
- 井上忠司, 『「家庭」という風景—社会心理史ノート』日本放送出版協会, 1988
- 鹿又伸夫, 「弱い紐帯の強さ:社会関係のネットワーク」小林淳一・木村邦博編『考える社会学』ミネルヴァ書房, 100-114, 1991
- 工藤保則, 「子どもの関係性の変化にかんする一考察—10歳前後の遊びを手がかりにして」『ソシオロジ』43(1):109-127, 1998
- , 「高校生の相談ネットワーク—準拠人・準拠集団・社会化」尾嶋史章編著『現代高校生の計量社会学—進路・生活・世代』ミネルヴァ書房, 159-182, 2001
- , 「意識の形成メカニズムへのネットワーク論的接近—高校生を対象とした調査から」『人間学研究』(1):23-29, 2002
- 編, 『中学生の進路と生活』(科研費研究成果報告書), 2003
- 安田雪, 『ネットワーク分析—何が行為を決定するか』新曜社, 1997

付記 本稿は、工藤保則「中学生の相談ネットワーク—家族・友だち・社会化」工藤保則編『中学生の進路と生活』(科研費研究成果報告書), 2003を加筆修正したものである。